

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024.12



令和6年12月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第12号 No.799

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二四年 一二月号 (通巻七九九号)

◇今月の二十首詠……命ある限り

山本 孟 2

■作品

河野繁子・小林能子他

A 片倉ひろみ他 18

B 改正大祐他 48

C 川口禮子他 60

A 中村恭子他 72

■オリープ集 若林美知恵・若松喜子他 34

◇今月の二人 斎藤慶太・野口久子 14

私と短歌との出会い (268) 石塚貴美恵 17

■《特集》写真歌合わせ 【責任編集】田土成彦 29

写真Aに寄せて……林 耕作 他35名

写真Bに寄せて……設楽まゆみ 他22名

■《第一歌集を読む》21 40

橋本曠子歌集『いくとせを』

―カナリア色のリボン― 小原香里

◇冬のアンソロジー 〈冬の響き〉 泉 嘉穂子 42

◇シルクロード・カフェ 【責任編集】木村文子 44

■鑑賞・三好直太の歌 17 〈蟹とハコフグ〉 久我田鶴子 28

■遊覧寄港〈映画と漫画〉 丸山 修 46

■歌壇月旦 檜垣美保子 47

繋がる〈今〉

■十月号作品批評 64

A……田土成彦・八田暁美

石塚貴美恵・斎藤順子

B……穴戸千佳子・尾形悦子

C……若林美知恵

オリープ集……山本 孟

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

最近の歌誌より (編集部) 59

クリップ……84 神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

命あるかぎり

山本 孟

誕生日ヴァレンタインデーと人は言う昭和七年は何でもない日
 使用中の診察券を九枚持ちどこへも杖つきとことこ通う
 朝十錠の薬ゆっくり消化され落着く先ではたらき始める
 老いの身の余力引き出す鍼治療神から盗んだ三百のつば
 生きおればいつしか老いのしのび来るのそのそ奮起鍼打ちに行く
 半裸体ベッドにうつ伏せつばに鍼 ありかをさがす鍼師の呼吸
 階段の上り下りを手摺り持ち図書館かよう体を守る
 外出は買物のメモ、水を入れ、ハンカチ確認スマホ忘れる

一九三二年生まれ。
 一九九一年「地中海」入社。
 大阪支社所属。
 歌集に『竹菰菜道』（二〇〇五年）がある。

家の景見慣れた瞳が変わりゆく車窓の景を飽かず眺める

靴をぬぎ電車の窓にひたい当て飽かずにながめた幼かった日

君はもういない空虚なベランダに雀来鳴くをじっと見ている

雀らは何のお喋り 縄張りか ここはわが家の縄張りなのだが

小心の雀わが家のベランダに糞してチチチそろって空へ

補聴器は老いの身ならば必需品誰もが買える器具にと願う

補聴器は音をとらえて話し声騒音までも耳孔へ入れる

難聴のベーターヴェンの音楽に胸を打たれて溜息をつく

四日分作り置きしたカレー鍋温めるたびに水分抜ける

青汁は飲まずブロッコリーほうれん草トマトをサラダにして食べる

読み出せば止まらぬ本に家事もせず独り身に慣れそのまま寝入る

今はもう迷うことなく命ある限り短歌詠む独り身の日日

作品 A

河野 繁子

岩煙草

・雁

パソコンの誤作動おこす午前四時私の時間のぬくもるを待つ
「女房はどこへ行った」と我に聞くまぼろしの野をとこまで歩く
われの名を忘れおりに魂のどこかに我を住まわせるひと
ベジタリアンにレバーを勧める人ばかり鉄分鉄分頭は錆びて
血管の浮かぬ苦勞を掛けており蝶々のような針も刺さらず
体内に滴滴と入る人の血に違和感もなく混じるA型
興味なき娘に野草の水やりを頼みておれど岩煙草如何に

小林 能子

折りつつ

・羊

空焦がし朝市通りの焼けるさまテレビにおろおる正月二日
降る雨は雪に姿はるか能登の氣象テレビに辿り一日が過ぐ
ほの暗き八重桜散り黄緑のイチョウ五月の風に眩しき
オリンピック開幕式曲「地中海」カタルーニヤ人の愛しき折りも
爺杉とか婆杉に心寄せる人「原発廃炉訴訟原告団」に入ると
世界中がパンデミックを共にして一つの平和も分かち合へぬとは
夜半覚めて座してボトルの水を飲む折りつつそのひと口の水

近藤 栄昭

日常

・虹

白い壁オレンジの屋根テラロッサ吹き抜けてゆく 風、地中海
松原に白いブラウスワイシャツが卒業アルバム青春のポーズ
松原の際の若者靴を脱ぐ渚はもうすぐ日常破るか
送り盆海へに線香秋の花家々集まり湿る浜砂
ザクザクと山道埋めるとんぐりの丸みを潰す避け得ぬ足は
涼かぜに盆が終われば秋となる刈口の平稻たば匂う
人混みを縫って進んでサッカー台急がさる今日は安売り

近藤 芳仙

夏を遊ばむ

・信

八十歳の葉月をしぼし遊ばなむ 流るる早き時間を止めて
四季彩とふ中華味はひつくすまで舌の目覚めて箸も休めず
時折に懐かしくなるプリンスホテルは地中海大会なしたる所
霧雨にけぶり苦むす木も石も彼の日と同じ雰囲気かもす
静もりしプリンスホテルの池の面に魚のおきとふ音が聴こゆる
川水の緑を反す昼さがり すきて夕べに透ける白波
折にふれここを訪れこの空気吸ひたくなりぬりフレッシュせむ

神田 鈴子

雨後の坂道

・大

火の粉降るなかを逃げたる幼き日いまウクライナの子らに重なる
木目込みの小さき雛に満たされてひとりの部屋の仄か明るむ
またの逢ひあれと願ひて雛納む生くる力を折る夜の更け
あす咲かむ桜の蕾うひうひし溜め来し力のふくらみ見せて
むらさきの小さき蝶の舞ひ出でぬ迷へるわれに翔べとばかりに
あざやかに紫陽花の青咲き満ちて夫の回忌を告ぐる水無月
ウインドウに映る姿に背を正し踏みしめ歩む雨後の坂道

上林節江

みちのくの母

・湾

坂上直美

A.D. 2024

・天

この丘をのぼれば壺のいしぶみと見上げる先に天竺の文字
 森奥へわれの心をわしづかみ歡喜のごとく水芭蕉の白
 三陸とおなじ定め能登なるか頻発地震も呻きの声も
 ふっくらと少女さびしてキャッキヤツとはもはや騒がず涼し孫の瞳
 冬せまる水楢の森いぢまいも残さぬごとく木の葉散く
 会うて泣き別れに泣きて卒寿なる想いのかぎりを隠さず叔母は
 泣き言を是とせぬ母に育てられ気づけばわれもみちのくの母

菊地栄子

常緑樹

・海

残雪の白き月山今日の日の白きスニーカー呼び合うごとし
 鮭に塩擦り込み塩を洗い抜き乾し上げると軒下の鮭
 一泊する連歌の会の定宿は野蒜の松原津波が攫う
 指先に甥の頭を掻きやりぬ教師に疎まれしそちぢれ髪
 発展は河川にありしか秋の日の木曾川掛斐川眩しみて越ゆ
 おおらかに石垣つづく城跡の樹木の道は一会にありし
 小鳥らが埒に帰る常緑樹今宵は風をはらみて揺らぐ

草刈十郎

敗戦日

・世

あの夏の玉音放送聞きてより七十九年よくぞ生きたり
 大の字に眠る赤子に団扇の風送る静かな夏の日の午後
 敗戦日今年も来たりて思ふのは戦中戦後の苦難の数かず
 戦後すでに七十九年一日の長い八月十五日なり
 魔線と無人駅ふえん水のひとり芝居を見てあるベンチ
 万緑に山も野原も輝けど非戦非核の遠き道のり
 世を嘆き怒りを晴らす術もなくひと日ひと日を老いは生くるのみ

今さらに哀しきことはなけれども春の愁いの身をめぐりつつ
 春なのにいや脊だからか世間には暗いニュースが日々滴ちあふれ
 名を捨てて故郷を捨てて五十年ひとり死んだ桐島聡
 ベットポトル弁当からの散らばった小さな部屋を遣した男
 「どれくらい歩けば水が飲めるの？」と小さな象が母象に聞く
 わたくしが夕餉を食ふのときも世界のどこかで子供が死んでる
 家もなく家族もない少年よ君にあるのはただ希望のみ

坂出裕子

月

・洛

コロナ禍も酷暑も忘れ中秋の名月浮かぶ空を眺むる
 こんなにも滑く美しきかコロナ禍の夜空に浮かぶ月の輝き
 マスクして人混みを避け生くる世に見上ぐる月の滑くうつくし
 いくたびも眺め来しかど十五夜の月の光はかくも美しきか
 とりわけて美しく思はるコロナ禍の十五夜の日の月の光は
 いつかまた眺めらるるか見上げては陶洗はるるこの名月を
 コロナ禍もマスクも所詮ひとつ世のひとつとき横切りゆく影かとも

佐藤道子

老い

・甲

ゆきずりの人の給へる蠟梅の朝の光にしるく匂へる
 昔の事今もさやかに想へるも今した事は今すぐ忘る
 一日一日何事もなく過ぐすこと仕事となりぬ九十五歳
 お元気ですとねと声かけられる朝の道綱渡りなる一日一日を
 耳なりと家のきしみのその度に亡夫が見守りくると思ふ
 若き日の詩情はあらず見たままを記録するのみさみしき齢
 思ふこと思ふがままを載せくるる歌誌有難し高齢者には

篠原まり子 歳月 ・羊

再びを「塩をもすこし」開きたる逢いたき友よ別れを惜しむ
微かなる雪の陰あり幼日をふと憶い出すベチカの温もり
親子熊射殺されたる現実を「プーさん」好きの子を思い遣る
零れたる花粒ひとつも拾いたき過去形ばかりのミモザの黄色
今は亡き師と巡りしは石山寺春浅き日の足早の旅
いつの日か生れ変われば何になる小鳥と暮らす私になる
出産の近づく孫の幼な顔時折にして「私がママよ」

柴田登志恵 メメント・モリ ・天

捨て猫は人工島に餌を求む死を思ひつつ今日の花摘め
存分にひと代遊びてゆきにしか天女の肩幅の絹雲白し
ころよき京言葉もてひひなさま罪科もはら引き受け百歳
うすべにに人影たたしめ遊びやせむ遊びやせむとぞ花降りしきる
赤練は毒持つ長き尾を曳きて海岸ちかく空翔ぶ形
はなだいろたたへる湖の水深く小さき魚とる小さき舟に
問ひもなく答へも持たぬくちなはの尾のひらきゆく透明な界

鈴木結志 転向文学 ・福

感情をおさえきれずに念込めて三十一文字に心をそそぐ
立ち上がる力信じる第一歩年の始めのうたねんころに詠む
「孟母断機戒」尊びて今日もまたおのれを正しむじかうた詠む
沈黙は賢者の美德うつし絵に当意即妙の意におのれを見つむ
平和世に考えられぬ官憲の圧力に耐えし「転向文学」の労苦を偲ぶ
日連の怒たうのやうな意志力の書にひき込まれとりこにさるる
意連連綿躍動美自在藤原佐理の書巻ころにとどむ

関根榮子 Tシャツ ・埼

いにしえの若菜摘む歌思いつつ雪はあらねどモチグサを採る
落椿の風情はあらず小鳥来て蜜吸いながら花びら散らす
手抜きまた料理の変化かいつの間に揺鉢すりこぎ使うことなし
洗抜きて会津みしらず送り来し歌の友はも今はもう亡き
戦禍地の子供の映像によみがえる幼日のわれの防空頭巾
手に負えぬ大木となりし隠れ蓑思ひ出はさておき伐採をせり
若きらのTシャツ滑し冬服で急に夏日の街行くわれは

関根和美 愛 ・埼

ちちははが身を慈しみたまいたる幸数えつつ寝入るも温し
わたくしはいかほどの愛のこせるや男の子一人と病む娘のなかに
石積みのアーチ橋かかる川の辺をさくら菜の花つづくよはるか
なつかしき師の名に触れる人のあり梅雨のあいまの巡礼のみち
晴れ女と自称の連れいてわずかにも目の射しきたる殉教の地に
「鹿兒島に行ってきました」ばばさんに絵葉書出すも間に合わざりき
十年ののちの「地中海」思いみる私の生もまたいかにある

高尾恭子 能登の雪 ・大

鈍色の空が沈んでくる夕べ能登のべた雪しみじみ重い
紙くずになった短冊おきなこの夢は踏まれて路上の夜明け
山里に実るザクロはさっくりと裂けて鬼子母の口もと赤し
足あとに小さく名前をきざみつけ過去と明日のはざまをねむる
吐瀉物を洗いながして人生はこれでいいのだ夜の十三じゅうさん
またしてものどのか正論に足のシモヤケむすむす痒い
マルハラにカスハラバワハラはらはらはらと柔らかすぎる言葉をさがす

高津砂千子

尾道

・雪

あたらしき観客席ゆ見おろせる天然芝のみどり呀えさえ
ゆったりと広がる翼のような屋根サッカ―場に夢のふくらむ
ピンク色の立ち葵ふわりふわりとて検査を受くるわれをなくさむ
大き揺れ二回ほどある夜の更けここは病院あせらずとも良し
まちがいを防ぐためにと撮られたる顔写真はも七十八歳
じき兄の忌明け法要家族のみになすとし聞けば言葉のあらず
亡き友の生家なりにき新聞の記事にきりしめ尾道へゆく

滝田靖子

里山

・新

早暁のアンテナを鳥ら奪ひ合ひ今日は雉子鳩が高らかに鳴く
看護師にありし日の記憶きつしりと詰まる身体を粗末に暮らす
先月は裸木だつた朴の木今日の緑に歓声あがる
さみどりに彩られていく里山の木木の新しい春を羨しむ
みづからの命はみづから守るもの日向に長く枝を伸ばして
旅立ちを見守る仕事手放して里山に芽吹く命見てゐる
門番のやうに窓辺に昼寝して不法侵入の風に吹かれる

田土成彦

セロファン

・宙

セロファンがごみ箱の中でほぐれゆくまるで時間が千切れるやうに
柿落ち葉さくら落ち葉と色かへて地球はめぐる地軸傾け
言ふなれば素足に寒の水を掻く鴨の営為もただ事ならず
琥珀色の羽根美しきゴキブリを打たねばならぬ理由を探す
うつとりと眺めてみたい空を呼ぶゴキブリの羽根の目にかがやくを
マンションの窓の明かりがひとつ点き綴られて行く一つ人生
寝るといふ楽しさ起きる喜びのいつれ勝ると言ふこともなく

田土才恵

尾瀬

・宙

冬ざれの能登の鳴き砂大地震のあとの浜辺に霊鎮めあれ
朝市の人の温とさ賜りし手作りスプーン形見のように
遣しゆくものなどあらぬ一生とも描きし墨画持て余しおり
諦めて閉じては開く旅パンフ水芭蕉咲く尾瀬遙かなり
憧れし鳩待時に来たり若くはあらぬこの足に立つ
八十路すぎ持ち続けこし夢叶う尾瀬の湿原いま歩みいて
瑞々し朴ノ木の葉に触れながらガイドの声の風に紛るる

玉井綾子

今も

・羊

タブレット・教科書・水筒・ジャージ入れ通学バッグのファスナーは死ぬ
教室の後ろから見る椅子の下かかと踏んだり半分脱げたり
雷鳴と雪に違和感 市街地の甘きアンコンシヤスパイアスの
読み終えし「ジャンプ」を電車に置き捨ててバブル時代の男は手ぶら
お知らせ音聞こえず終わりを待っている吾を洗濯機も待っている朝
てっぺんは尖っていると思つてた初登山に知るミクロ経済
アナログは山、デジタルは波のごと押し寄せてくる仕事は今も

中島央子

花冷え

・森

何ごとの無き一日にスパイスを振れるごとくに雨降りはじめ
雨の音を池は吸ひとり懸命に咲かむとしてゐる桜映して
日没が日毎に延びてやり残したことはかり思ひ出させる
「あれ」「それ」と指示代名詞をまき散らす鈍きあたまをさんぶり洗ふ
花冷えの夜はむすめと差し向かひ熱燭一献小犬も侍る
年毎のわが検診表に「歳相応」と医師は宜ふ肩・腰痛むに
寒暖の段差あまりに大きすぎ聴くともなく聞くラジオ深夜便

永田進一

イグノーベル賞

・山

中村博子

ゆるゆる

・漣

夏帽子忘れて陽ざし浴びおりぬ午後の道ゆく哀しきわれは
 冬瓜は思い出の品亡き妻の好みし料理鶏肉甘煮
 吹奏楽定期演奏は百貨店前セーラー服の誇らしげな顔
 大谷は50・50を実現すホーマー・盜塁 世界の晴れ舞台
 哺乳類はお尻の穴からも呼吸する豚公実験のイグノーベル賞
 百二代目総理の石破氏質朴で連合三田会の孤独な姿
 名月の芽え芽えとして輝きぬ虫の音すだく林のなかに

永塚節子

時間

・銀

空っぽの時間を欲りて豆もやしのひげ根ひたすらむしり続ける
 音もなく風にまかせるやれはちす終りというをまざまざ見せて
 何をしつつ過こしし日目かえこの花の咲くも知らず散るも知らず
 とうとつに甦るもの串だんごあの日あの時あそこのベンチ
 砂時計に合わせ滴るコーヒーを待つ間五分間 何も思わず
 聞こゆるは波音ばかり夜の海を静かに照らす十六夜の月
 枝を切られオブジェと化したる一本の赤き新芽は生きている証し

仲西正子

沖縄福州園

・沖

とおき世のこの界限に口吟の男らあらむよ長閑けしや久米
 福州園に瀑布の音を聞きてうれし李白の像の掲ぐ盞
 歳月は巡りめぐれよ那朝の地に根付きて香れフクシユウミカン
 この島に鯨波よするな福州園に習近平の降り立つ写真
 隣国の有事に備うと風吹けど福州園の柳さやくな
 空爆死の母より命の生れたるとラファよりのニュースああ肝苦りさ
 孤児として生まれたる児の産声は悲痛な叫びラファの空爆

脳内のくらくら揺るこの日ごろ京都は三十八、九度
 この前に奈良公園の鹿観しは難病に逝きし菊岡栄子さんと
 わすかなれど能登震災の義援金郵便局から送金せし午後
 山階校見つつ訪ねし東御坊速如上人を立ち止まり見上ぐ
 平安の王朝世界の匂いたつ「源氏物語」五十四帖の色」
 菜穂梅雨のあい間のひと日啓子さんに暗れ女と言われ北山別院
 杖を突く友の歩調に合わせつつ修学院駅からゆるゆるゆる

西堤啓子

朝の虹

・天

コロナ五類にマスクはせずせば街さえも面変わりしたタワーマンション
 私も見た朝の虹 ウェザーニュースに画像投稿の人とつながる
 遅咲きのコロナ感染これがその咽喉の痛みと知る午前二時
 他人事にする本能の働きが傷みを遠く放つ 蒼空
 流れる雲が言うこと「なるようにしかならぬ」深海に大きな花揺れ
 病が連れてよこした易怒・作話 誰も悪くはない春です
 どこかできつと君は帰ってくる」とロシアンティリーの甘きで待った

白子れい

朝に夕べに

・洛

ひさ久に新幹線のひとり旅坐す窓ぎわの景色が走る
 大鳥居くぐれば白き参道の迎えくれたり箱根の神社
 吾の短歌お皿に書かれ御神前に飾られあるにひたすら感謝
 コロナ禍に温泉めぐり諦めて地元風呂場で温泉気分
 細く伸びし桜の小枝に雪積みて雪の花咲く疏水のほとり
 枝先の蕾日に日にふくらむを楽しみ歩む朝に夕べに
 ふたたびはきたらぬ「とき」を過こしおり心豊かに踏みしめ歩まん

浜谷 久子

息をする

・地

片付けたい雑多の荷物片付かぬ一つに資料積もり積もつて
暮いきた人びと今は亡きあとの寂しさだけが紙を黄ばます
風便り節目の糸を結び直す過ぎる多くは胸処のままに
出会いそして見送る人びと返せぬ恩やり過こした時ついに戻せず
永の別れ時を要して背う日ひと歳ふた歳深まる寂寥
さりげなく変わる景色に息をする新たな出会いと旧知の縁の
芥子葉はどこからともなくやって来て黄の花咲かせ畑に棲み着く

檜垣 美保子

砂丘

・昴

鳴かず飛ぶ雁行を橋のなかほどに見送ればあおき空すみわたる
やわらかき砂丘の底の底知らず砂に埋もれし人の足あと
飛ぶ砂にちりちりと頬うたれつひたすらもどる風の砂丘を
いにしえに嘆きの霧とうたいけるひとあり街はいま霧のなか
魔駅の錆びたる鉄路は最果てと最果てつなくごときしすけさ
この声が好きと言う友とバスを待つうしろの山にほととぎす鳴く
二度三度尾羽を上下に振る小鳥さよならの合図とおもう日の暮れ

福田 庸子

春の峠に

・今

木斛の葉に点りゐる月光の厚みに真夜のにぎやかさ満つ
稜線を占むる木木ありひとときの光に燃ゆる晩秋の午後
風の中に仔を守りあしひと月亡骸のまま蜘蛛は残れり
パンを千切る指にしみくる冷たさよ母居らぬ部屋に冬を迎へぬ
住む人の消えたる峽に今年また傾りを淡く山桜咲く
朽葉積む沢よりくだりくる水の沁みいる音よ春の峠に
山法師花を減らせど水無月の森に冴えゆく亡き人の影

藤田 美智子

若葉風

・新

重なる落ち葉をはつかにふるはせむ夕へ草むらに鳴く蟋蟀は
手のごときしくさを風のなすらむか果となる一本めの糸を渡すと
もう一度聞きたき声は聞きとれずあまたの音を雨は集めて
亡き人をまだあるやうに思ふ日と遠くなりたる姿恋ふ日と
みどりこの発語のごとし雪解けの土を分けたる水仙の芽は
泣き方にその訴へを知りし日のはるかとなれり若葉風吹く
憚らずもの言ふ人とされてあむ蹴るにほどよき石見あたらす

藤森 巳行

敬老の日

・銀

老人の日に結婚し五十六年新郎新婦も老人となる
老人の日が敬老の日に變はり老人我は尊敬対象
住みにくい世の中なのに耐へて生きる昭和の老兵いまだ死なざる
復興と高度成長支へたる企業戦士も八十越えたり
良いお茶と和菓子携へ娘来る敬老の日に孫と二人で
歩み来し歴史は宝貧しくも己の決めた正義に生きて
八代垂紀東京新宿なみだ恋酔ひどれ我のああ歌舞伎町

船田 清子

季の移ろひ

・天

せめぎ合ふ暖氣と寒氣が呼ぶ春を待ち望みつつきさらぎをゆく
沈丁花の蕾一斉に出そろふと聞きて帰ればわが家も同じ
隣家よりニオイパンマツリの香り立ち五月の午後を満たしてやさし
一面の薄雲透かす陽光にますます盛る五月のみどり
戦後すぐ求めしわが家に怪と南天植ゑしは母の想ひや
この秋はすでに枯れたる南天の植ゑ換へなさむよき苗あらな
昭和なる二十四年にこの土地に居を得て父母の植ゑし南天

本元由美子

心の在り処

・岡

COVID 感染者数の推移見て怯えし日々よ今はガザの死者
空爆に怯ゆるガザの子の瞳 為政者のころろいつこにありや
避難所に温きコーヒーと幼な子が広ぐる絵本のこの日常を
平和への願ひを繋ぐ人とならむ終戦の八月に生れし我ゆゑ
着替へなどそそくさと詰め病院へ 振り返る窓に夫の白き顔
アンニユイが煮詰まる頃の夕暮れはラタトウイユの鈍き赤色
今日もまた夫と二人の田圃道ウォークしつつ今生を数ふ

牧 雄彦

太平洋の夏

・大

あへぎつつ螺旋階段のぼりつめ太平洋をまなしたに見つ
タンカーのとほく沖ゆくかげ見えて晩夏のひかり岬に注ぐ
岩を打ち砕くる波の音絶えず生き継ぎてけふ八十六歳
ひと粒のいのちを生きて今われは太平洋の夏を見てゐる
戦時中爆撃受けしとふ灯台の今はしづかに海面を照らす
逝きし友の家を過ぎたりながなし「おう」といふ声聞く思ひせり
手を振りて別れし日いまは遙かにて君が白髪輝きゐたり

松浦 禎子

ある日に

・羊

須賀敦子夫ベッピーノに寄りて立つ古びしローマの石段の上
信仰を伸立ちとして深めたる愛のかたちの物語をまた
子の夫婦を親のごとくに見上げているハスキー銀はもう四歳に
車の窓より顔をのぞかせて銀次は眺む青葉区街を
行きずりのよきひとに頭をなでられてハスキー銀は居すまい正す
二枚目とう言葉をさらりと肩にかけこの秋を逝く アラン・ドロン
香川進の納骨式があるという炎暑の続く早暁の夢

松永智子

待つ

・嵐

さりながらさりながらを裡にして山の頂きに日の射すを待つ
真夜にきくにんげんの声われを呼ぶ声にはあらず遠くなりゆく
ひとり立つこの空間にまきれなきものとしきけり脈搏の音
何故に生きてゐるやと問ふ声にいらへのあらずチョコレート嘔む
あかときの闇飛び交ひし蛩いまいづくにいのちひそめるらむ
待つことの多き一世とおもひつつ音なき闇の明けゆくを待つ
はれわたる空に浮く雲飛ぶ鳥のかけ見えずただ静寂のとき

松本多摩子

日の暮れて

・桜

日短や買ひ物帰りに日の暮れてライトが照らす家路を急ぐ
東京になんでもあると思うからふるさとじまんのみかん送れり
新年を一瞬に変える地震あり揺れる地球に吾は住みたり
修善寺に竹のさやさや聞きながら河津桜は葉ざくらばかり
親族の揃いて義姉の骨揚げは膝のチタンが黒く残りぬ
たっぶりの焼き穴子入りちらし寿司母の味という娘の笑顔
熊除けの鈴を鳴らして星観察はるる来たり孫との旅は

三浦 好博

折り句七首

・銚

ウクライナは苦しみをれど雷帝のイワンの裔など何するものぞ
パレスチナは煉獄なるよ住処さへ血の海にしてなべて廢墟ぞ
彼の夏に君と登りし津軽富士はるかブナ林たなははりしよ
彼のときに聴きし「アメリカ」尽きせなくハート射し来ぬただひと恋ひき
朝早く凜と吟ずる漢詩なり杜甫も李白も嬉しがるらむ
ふるさとの裏山にある地の霊を粗相にすればうらみは怖し
さるすべりはとうに衰へ野の草の泡立ち草も黄に色づけり

三 木 まり 琴

・昂

羽根切られ渡れぬ白鳥こうこうと仲間を呼ぶか湖のほとりに
薄水の張る湖に残り白鳥は翼をたたんで小さく眠る
深々と羽根にくちばし埋め眠る白鳥一羽の夢に幸あれ
銀の星、青い彗星さがす夜の白鳥眠る湖は静か
ひと足もふた足も先に黄泉の友、新月に逢おう夜を待とう
風荒ぶ早朝の庭の北隅に冬の草のいのち鮮やか
吹き荒ぶ風ふと止んで難く葦に風の葉を挟んで帰ろう

宮 本 靖 彦 夏さまざま

・凌

延長戦一球に泣く鶴岡校甲子園の土選手と生きむ
別れの朝挨拶のごと首立てたり帰りに見しはクロのなきがら
散歩道なせてねと伏すブルの子に手をのぼし又ひっこめぬ
吊りさがる電線の影どこまでも九月の暑き歌会に行く
災害の前日持出プログラム靴、金、食物、スマホに菓
邦人の学童刺され死に到る我等睡ひし友好の地にて
父に購ひし土産のステッキ我持ては丁度似合ふと妻笑ひ居り

三 好 聖 三 陰

・伊

草刈りのあいまあいまの小休止樹木が落とす影をたよりに
アジェのバリバリの荷風に迷い込む植田正治の〈風〉に惹かれて
遊歩者・売春・賭博・無為・倦怠まずは付箋を貼り付けておく
掛簾を噛んで快楽に耐えている葛飾應為の枕絵の女
わが兵を五千人殺せば落とせると敵攻略の腹案を言う
にぎりめし三個に葡萄一房を添えて今日の昼飯とする
おおかたは語らずに行く日々のはとりに背き梅の滴ちたり

御代田澄江 戦の影

・茨

地球上全てを覆ふ戦の影東南西北世は騒然たり
地球温暖化の時代は終り地球沸騰の時代到来の発表ありぬ
処理水放出 IAEA 認むれど魚らは無心に飲むトリチウム
人の移住叶はざるべし月面を酸素覆へる術なかりせば
深々と吾が心にも沁みにける「舟唄」悲し八代亜紀逝く
知らぬ間に他国の戦に参戦し兵役召集孫子ら危ふからむ
風邪長引く吾にも一度病院にと訓す子の居てわれの幸ひ

もとむらしげと 黒猫

・そ

花好きの父母逝きしより庭先の花に水遣る日々のはじまる
ちちははの遺しし花と猫の世話わがしずかなる日々を潤す
朝夕にわれを待ちいる猫あれば生家は今も母在るところ
壁の中より子猫の声のきこゆればボーの黒猫浮かびて焦る
六月の夕べの卓に置かれたる小さきキーキに父の日と知る
読みかけの本幾冊も置かれてありのすきびにわが日は過ぎる
いすこにて読むもよからむ厠には好きな歌人の歌集を置けり

桃 原 佳 子 秋の気配

・沖

庭隅のこぼれ種なりトレニアの花つきつきと咲きいたりけり
我が家の窓の景色は変わりゆくダンパ忙しく田圃行き交う
九月半ば猛暑は続く萎えし茄子の添え木に止まるシオカラトンボ
厨辺に立ち居る最中じんわりと燻り続けし結句の浮かぶ
娘二人を育てし月日は過ぎ去りて年寄り二人静かに暮らす
四番目に生まれし夫ははらからを皆見送りて米寿となりぬ
草間より朱の彼岸花ほつぽつと咲き出づれば秋の気配す

山下雅子

ひまわり

・習

ミニひまわりされどひまわり一りんに暗きコーナーほのほの明かし
見るほどに金の脂の一しずく欲しとふれたり黄の輝きに
ウクライナの国花ひまわり戦場となれる大地を黄に染めて咲け
ゴッホ描き夕暮詠めるひまわりの金の輝き平和の明かり
考える暮なる人間の尊厳にいかにかかわるや生成A—
ほつほつと開く桜は東の間に満開となるいのちの力
日を追うて花のいのちのみなぎりに耀う一樹の枝々ふくらむ

山野幸司

今日

・沖

今日もまた稲刈り果てぬ田の畦に妻と寝げのおにぎりを食む
正月の賑わいは去りテーブルに冬の陽やさしみかんが香る
田に伸びる草はわれ越え背伸びする春の扉をたたく音する
雨上がり光差しくる居間一人妻の寝息に心落ち着く
雨の中除草機を押す株の間にひょっこり現るお嬢蛙が
百万の軍馬送りし門司港に今も変わらぬ波立ち始む
トラクター囲み漁る鳥達のおだやかに住み分くる様平和の形

山本

孟

独り生く

・大

木洩れ日のちらちらそそぐ怪ゆけばあぢさむ枯れて葉を垂らしある
玄関を開くれば一本の黄金立つ年に一度の夕映え公孫樹
春陽さすローカル線の影ゆれてつき目つき目に童謡うたふ
バス降りて傘さすまでを樹雨に濡れ大雨の中分け入りて行く
週刊誌の見出し目にして俗世知る冬こもる日に爪を切りつつ
足に効くサプリメントの広告をしはし目にしてくづ籠に捨つ
老い独り出づる生ゴミ捨てに行く余力大事に生きねばならぬ

養学登志子

日々いとおし

・凌

芳名録横断なりしや筆ペンのキャップをとりて出されし一瞬
駅階段のほりきるまで見ていたと電話のありぬ案じられてる
あたたかなところで冬を越したいと亀虫の来てはると死にけり
里の山は桃色ならむ立離切子の蓋の金平糖の彩
楽観も悲観もあらずと痛を連れおもしろう詠む和尚の遷化
花に埋もる棺に歌集添えにしと白きお骨となりしや歌も
吾の歌より象形文字の鳥たたせ額掲げれば日々いとおしき

横田敏子

年輪

・福

元日の大地震、二日の飛行機事故まさか、まさかと釘付けとなる
3・11にフラッシュバックしそうなる気持ちに蓋する もう大丈夫
冬を耐え樹木はゆっくり目覚めゆく去年の年輪ひとつを刻み
春の空淡きブルーの果てしなく心に翼つけて翔けたし
放射能の処理水放水始まりて当然のように慣らされてゆく
さりげなくペットボトルを開けくれし人あり歌の勉強会に
七夕の午後のLINEに届きたる曾孫誕生の動画の産声

磯田ひさ子

ウィーン

・森

いにしへの都大路をゆくごとくオペラ座前を胸張り歩む
イスター近きウィーン赤や黄の花を飾りて人の気あふる
わたくしの思ひあがりか日本車に一台もあはぬウィーンの街
若きは今は大切クリムトもモーツァルトも意にも介せず
スマホ手に歩きに歩きまっしぐら孫はみやげをスーパードに買ふ
切々と身の衰へを感じつつ孫に引かれて体験を積む
アーモンドの花咲く街をシニア用一日切符のトラムに巡る

市原やよひ 夫

・萬

今日からはここがあなたの住まいです芝の広がる丘の上です
 一言の返事欲しくて振り返るそこには居ないあなたは居ない
 突如来る悲しみ捨つる所なく一人の部屋は一人のままに
 それらしく形を整え寝かせおく隣のベッドの大きぬいぐるみ
 夫逝きて二人の自分居るような夢と現を行き交い生きる
 返事なき会話成立していると話し続ける生ある如く
 野に出てで乗しげなる夫思いつつ一人し探す名残りのつくし

梅本武義

終の住処

・羊

また朝が来たか目覚まし老いの身は自由のはずを心を急かす
 花の季がはや巡り来る昨年よりも病名の増え通院増えて
 膀胱にカメラの入る体験に腫瘍があるの医師の声聞く
 偶然と思いはすれど下がり来し蜘蛛を許さず入院前夜
 手術後をベッドに動けず点滴を見つつ思えりガザの恐怖を
 夜明け前息子の出勤のエンジン音書き残すこと思いつつ聞く
 生れ育ち終の住処が夕光に白くふんわり李咲く里

大浪美雪

水の匂ひ

・森

房総に冬の雷鳴りつきぬ齧起しならぬ何を起こすや
 西風に乱れ降る雪ぼたん雪窓のガラスに張りつきては消ゆ
 キッチン窓に吹きつくぼたん雪見つめるわれと向かひの猫と
 朝の陽に架線に積もりし雪の落つひらつひらつと鳥飛ぶやうに
 松が枝より落ちつつ雪のくだけ散り霧状となり虹を見せをり
 雪降ると知つてゐたのか蟠螂は切りたる秀枝に卵袋のあり
 二月の水の匂ひのする風に面上げゆかな春はもうそこ

奥田陽子

枯れるもの

・羊

枯るるもの皆枯れ果てし一夏なり伏しいるものも火に焼べゆかん
 貯水池の荒草叢の色変えて風立つときを穂の波となる
 四季はもう無くなるという穂の紫蘇のちいさき花を看はじめたり
 睡まじきと言えぬ年月重ね来し母とわれなり花を手向けん
 臥してありし母のみ浮かぶさびしさに読経の声の時おり混じる
 母のおもいようやくに知る齡来てつつしみ思ふ享けたる幸を
 咲きのほり夢のようなる立葵児の指す方に夏は近づく

小野雅子

筆記体

・羊

見事なる薔におもふ小さくてすつばい昔の五月の薔
 をさな子の歩みに合はせ立ち止まりまた歩き出す若き父親
 短歌ありてひとの想ひと生活を肉声で書く班別歌会
 読み終へるのには惜しくて数ページわざと残しぬ新刊歌集
 筆記体はやく書くための訓練は無用となつて過ぎしとしつき
 寿命にも寿命のあるといふ落語 水売りといふ生活もありき
 親しくはなかつたけれど折にふれ花にふれては思ひ出すひと

久我田鶴子

天真

・羊

雨の降る予報に傘をしのはせて友と見てゐるイタリア映画
 ダウン症の弟うとましき思春期の兄を描きて赦しに満ちて
 ひとりにて渡る路上に立ち往生それさへ遊びのつづきのことく
 ついさつきの話に聞きし子のこととひとつながらにシーンは進み
 とらはれぬころのままに手を伸べるジョパンニすなはちジョーの天真
 いくたびもあつたかいねと母はいふ娘の手とはあるいは思はず
 見舞へるをねぎらふ母のありがたう忙しいところは他人の行儀

今日の二人

歯医者にて、もしくはポール・モーリア

斎藤 慶太

患者にはムダな時間は取らせぬとキビキビ動くヒゲの歯医者
はF1のピットのような音を立て削られてゆく私の奥歯

toothの削れる音に「TRUTH」が流れ始めて脳を支配す

オリープの首飾り流る治療室力を貸してポール・モーリア
頑張つてポール・モーリア「TRUTH」をこの頭から追い出してくれ
タクト振るポールの魔法にかかったら治療室さえ高級喫茶
痛い箇所無いかと歯科医尋問す私にライトを突きつけながら
白状をせよとばかりにドリル替え歯科医はなおも我が歯を削る
欠けた歯に血が混じつて吐き歯医者で気取るハードボイルド

武甲山のごとく我が歯は削られて差し歯のための礎となる

□から私の奥歯は凹になり凸な差し歯の完成を待つ

掃除機にA1がつくこの時代じき入れ歯にもA1がつく

A1がついた入れ歯は白飯を八十八回噛んで食べさす

初めての連作

二〇二三年の五月に川野里子さんの初心者向けの短歌講座を受講する機会があり、それから短歌を作り始めました。しかし、自分だけで歌づくりをしていくことに限界を感じ、今年の一月から「新樹の会」に入れていただいで勉強をしています。

今回初めての連作にチャレンジするにあたり、通っていたユニークな歯医者さんをネタにしようとタイトルをつけましたが、そこは初めてのことで、連作のタイトルは題詠の題と同じで、全文がタイトルに関連していなければならぬと思ひ込んでいたのですが、十三首全部が歯医者がらみという妙な連作になりました。しかし、会の諸先輩に見ていただいたところ、そこを面白いと言っていたので、苦勞した甲斐があったと思つています。

なお、このエッセイを書くにあたりユーチューブでF1の動画を見たのですが、今はタイヤをポルト一本で止めているそうで、歯医者のような音はしないようです。

これからは、今回のようなおもしろ短歌ばかりでなく、季節のうつろいや人の心の機微についての歌を作れるようになっていきたいと思います。

今月の二人

母と姑

野口 久子

春うらら老いの繰り言きりもなく言葉で遊ぶ昼の縁側

縁側にひとり座れる老い母の影がうつれりふき込みし床ゆかに

蠟梅の移り香纏う老い姑は健やかな日々百五となりぬ

夏衣衣桁に一夜掛けおきて紫好きなき義母は耀く

しゃっきりと咲く鉄線の濃むらさきこころさし持つ人の如くに

忘れよう忘れられない天の川逆縁堪える母の強さよ

まぼろしに頭ちくる母に励まされ憂さも辛さもわれは越え来し

生きるとは遊びではないと言いし母の意志に沿いつつ日々を送らん

一人逝く黄泉の旅路にあきぬよう飴も入れたり姑の柩に

生前は口やかましき姑思う今ひたぶるに恋しきよ姑

薄紅の乙女椿は咲き継ぎぬ好みし母は逝きてふたとせ

ゆきずりの児にかけらるる芳りの言葉残るは老いのきざしか

胸ぬちにふと浮かびたる歌一首広告の紙に書きとめて置く

回想

どこまでも背い空が広がる長閑な千潟八万石に生まれ、薄曇の景が織りなす水の郷利根川の辺に嫁し傘寿となりました。村の仕来りの家族制度、解らない事ばかりで、子供を育てて生きているのでいっぱいの日々でした。その中でもいつもモンペのポケットに紙切れと鉛筆を忍ばせ、小昼の時に思いついた事を書き留めていたのが文章への最初の一步、次は疑問に思う事に反発するように住所氏名を明確にして新聞投稿という手段でした。一石を投じたら波紋が生まれて、出る釘は打たれ、生家の母を泣かせました。「娘の不始末親が詫びると太き声こぶしふるわせ耐える老い母」親不孝の限りをして自分の居場所を模索し続けました。思ってもいないご縁に導かれるように文章の世界に足を踏み入れ、少しずつ状況が変わり自由が認められました。農民作家遠山あき先生の御尽力があつてこそ女性の地位向上が定着したと思います。自分の文章に責任を持って心を込めて書くようにとの教えがあり、私は小径の端に静かに育ち、可憐な花を咲かせ実を結ぶ道の辺の草のように生きたいと思います。

◆今月の二人・斎藤慶太作品評◆

血が混じってるつばを吐き

斎藤さんは、福島県須賀川市在住。地中海のホームページから入会されたばかりで、県内の「新樹の会」に所属している。

・F-1のピットのような音を立て削られてゆく私の奥歯

今回の十三首は、すべて歯医者がらみ。奥歯を削られる音がF-1のピットの音に重なる。マシーンと化した「私」が歯科医に身を委ね、そこに口を開けている。

・ toothの削れる音に「F-1」が流れ始めて脳を支配す

「tooth（歯）に「F-1」が流れ始めて脳を支配すとして、「TRUTH」は、F-1グランプリのテーマ曲。となれば、いよいよ「私」はピットインしたマシーンである。

・オリーブの首飾り流る治療室力を貸してポール・モーリア

実際の治療室に流れているのは、ポール・モーリアの「オリーブの首飾り」で、「TRUTH」に支配された脳に対抗できるのはこれしかない。「力を貸して」と頼らんばかりだ。「流る」は「治療室」にかかるのならば、「流るる」と連体形に。

・欠けた歯に血が混じってるつばを吐き歯医者で気取るハード
ポイルド

歯科医院で血が混じった唾を吐き、ハードポイルドの主人公を気取る。辛い目に遭っているのだから、それくらいはね。

・A-1がついた入れ歯は白飯を八十八回噛んで食べさす

こういう「A-1がついた入れ歯」ができるのは、本当にまもなくかもしれない。良く噛んで食べさせてもらうのは良いことのようにだが、食べる楽しみは失われてしまうでしょうね。

◆今月の二人・野口久子作品評◆

きりもなく言葉で遊ぶ

評者・久我田鶴子

野口さんは、千葉県香取郡東庄町在住。書くことを手放さずここまでこれられ、現在は銚子支社に所属している。

・春うらら老いの線り言きりもなく言葉で遊ぶ昼の縁側

誰かの「老いの線り言」を春の縁側で聞いている歌とも取れないことはないが、おそらく「老い」とは作者自身のことなのだろう。いろいろあったが、「言葉で遊ぶ」ことができるまでになった（今）をしみじみと喜んでいる、と読んだ。

・緞梅の移り香纏う老い姑は健やかな日々百五となりぬ

こちらは、老いた姑の歌。健やかに一〇五歳を迎えられたとは、素晴らしい。「老い姑は」「老い姑の」として「健やかな日々」に繋げてみては、と思った。

・まほろしに頭ちくる母に励まされ憂さも辛さもわれは越え来し

こちらは、実母の歌。離れていても、いつも母を傍に感じ、励まされてきたのだろう。母あればこそ、今の自分があるのだという、母への感謝の念が滲む。

・一人逝く黄泉の旅路にあきぬよう鉛も入れたり姑の柩に

一人で行く黄泉の旅路の長さを思うのであろう、姑の柩に鉛も入れたというのは。一〇五歳を超えられた姑の死を見送る者の労いに満ち、四句切れがその効果を上げている。

・胸ぬちにふと浮かびたる歌一首広告の紙に書きとめて置く

十三首の終わりに置かれ、一首目と呼応するような連作の構成になっている。ふと浮かんだ歌を身近なところにあった紙に書きとめておく。生活の中に歌がある、楽しからずや。

この原稿のご依頼を頂いた時どうしようという思いでいっぱいでした。なぜなら、熱心な会員の皆様比べ、私は熱量が低くここ何年かは綱渡りで何とか地中海の会員を続けてきた状態だったからです。

短歌との初めての出会いは子供の頃、お正月に我が家で恒例となっていた百人一首のかかるたです。意味もわからないまま下の句の頭の文字を、目を皿のようにして懸命に探し、何枚取れたかでわいわいと騒いでいたものです。

学校でも短歌を学んでいるはずですが、劇的な出会いは残念ながらありませんでした。ただ高校の冬休みの古典の宿題に百人一首の暗記があり、子供の頃のかかるた遊びとは異なり、楽しくなかったという思いがあります。時間を隔てて百人一首を読み返してみると興味をそそられるものがあり、接する時期や環境によって同じ題材でも感じ方が大きく異なると思いました。

短歌をつくり始めたのは、浜谷久子先生との出会いです。同じ職場にいたときに「紙と鉛筆さえあればいつでもどこでもできますよ」と満面の笑みでお声をかけていただきました。下の子供がちょうど小学校に入学した時で、何か自分のために時間を使いたいと考えていた頃でした。文法も何

もわからないまま飛び込んでしまった感じでした。

歌会は町の集会所で月一回。集会所の桜の木の下でお花見会をしたり、春の七草を集めたり、グループの方々と一緒に美術館や講演会にも出かけて行きました。様々な条件が合わず、歌会の会場が定まらなかつた時期もありました。初めて手作りで合同



歌集を作った時には、自分の作品が活字になることがとても新鮮で嬉しく思えました。しかしながら自ら求めていくことをしなかったので長年地中海にお世話になっていても、短歌の方はあまり進歩がないかもしれせん。

仕事と母の介護に追われて何年間かは歌会に出られない状態となりました。詠草は

どうにか数をそろえるだけで、グループの提出日に間に合わない時が何度もありました。このまま継続していたらご迷惑になるので退会した方がよいのではと思ったこともありました。それでも寛大に対応してくださった浜谷先生のおかげでなんとか続けてこられたのだと思います。浜谷先生はじめ、私が何のお手伝いもできない間も、グループの運営のためご尽力いただいたグループの皆様にも感謝しております。

今、短歌は空前のブームといわれています。いわゆるZ世代と言われる若い方々がSNSで詠んだ歌を投稿し、その歌に対してまた投稿します。話題となった投稿がもととなり書籍化され、ベストセラーになったりもしています。時間もかからず、費用もかからず、いつでも気軽に短歌の世界に入っていけます。そのあり方に対する意見はさておき、根底にあるのは、心をとらえ、心を表現するということではないかと思えます。

何とか時間を工面し、顔を合わせて歌会をし、郵送で原稿を送る、それもまた大切なあり方だと思います。そこで生まれてくる歌に心が響き合い、意見を述べ合う。そんな歌会を継承し、そこに来るメンバーの思いを大切にできたらと思っています。

作品 A

(カ行)

片倉ひろみ

膝

・湾

引き出しの奥よりいでし千円札遅しきひげの漱石数枚
懐かしく漱石ながむ千円札あんなこんなど想いは巡る
どうなるか ATM に入れる古い札するりと入り戻らぬ漱石
調子よく階段下れば膝小ぞうごきげんななめ我を悩ます
肉離れのちに捻挫の数ヶ月人生いろいろ負けてはならぬ
オリンピックの勝負こだわる投稿に心貧しき行為は如何に
オリンピック金銀銅とあまたの人しほんで咲いてそれぞれの花

海保奈良繁

観ずれば

・春

実相^{くわんじゆん}入^{にふ}とのたまひし歌論すべてのすて現にそなはれり観ずればよろしく候
欣求^{こんきゆう}すもとめもとめて十二年安住の作歌すでに内在す
凡聖不二なにもかもみなありがたい吾が思想と言葉いちいち気をつける
現象なしその奥見れば実相の安らぎあり根深くありありと
「現象なし断ち截ればこそ」お経を誦す自由自在の佛性ありがたし
その儘を受ける生活善なりと調和の満つる喜びの満つ
ほとけとは解けることとのたまへりその儘「ハイ」毎日「ハイ」

笠井秀子

一日花

・北

同じ話すと友に指摘され傷つくもすぐ感謝の念に
コスモスの残りし花弁四枚に蜂たわむれる夏の終りに
日々カフェに髪をきりりと結びあげてコーヒー味わう颯健在
朱鷺色の空を同刻みあげるも一日たりと同じ雲なし
花柄の袋をもって買物におしゃれな翁吾は紺色
百日紅の花弁おちてコロコロと明日はどの花一日花よ
新聞を開くや彩る広告の記事より多し経哲哲字

片山幸子

転倒入院三か月

・岡

物音をさせても怒る隣人の顔は知らずに流れし三月^{かつ}。
令和元年の三月入院はコロナ無くよき友ふたりと仲良く過こす
帰り来れば町の文化祭近づきて短歌展示の電話行き交ふ
短歌の火消してはならじの師のみ声残れる耳に互選歌送る
百日紅萩も咲きゐる退院の朝息子夫婦と我が家へ向かふ
かなしみの幾つを経ても白寿までおほらけく生きし叔母が逝きたり
組みし手の肌辺に詠みし歌を抱く櫃に添ふは小人のごとき兒ら